



この秋、私は64歳になる。会社勤めから一念発起して41歳でサクランボ農園を実家のある山辺町で始め、もう少いで四半世紀を迎えようとしている。

山あり谷ありではあったが、成長基調で推移し、計約3畝ある農園の今季の収穫も、無事に終えられた。

それは、優れた栽培技術を持つ先輩生産者の方々の助言やご指導のおかげであり、実際の収穫作業に従事してくれた人たち、高付加価値のサクランボを生産するんだ、という思いを共有して歩んできた社員らの支えも大きかったと実感する。

もちろん、自分自身もサクランボのことを考えない日は一日もなかった、という自

## サクランボ果樹園「多田農園」園主 多田 耕太郎

# 転換点

負はある。そう言い切れるのは大病をせず、農業に打ち込んで来られたためだったのだが、健康の大事さを考えさせられる出来事が、2月にあった。

行きつけの床屋さんで、白髪染めをお願いして椅子に座り、正面の鏡を見ていた時の

ことだ。肩や首すじに寒気と重苦しさを感じた。

「風邪でもひいたかな」などと冗談まじりにお店の女主人と話しながら、染髪料を塗り終わり定着させる待ち時間に「コーヒーをいちそうにな

り、たばこを一服した。この頃の私は、1日40本は

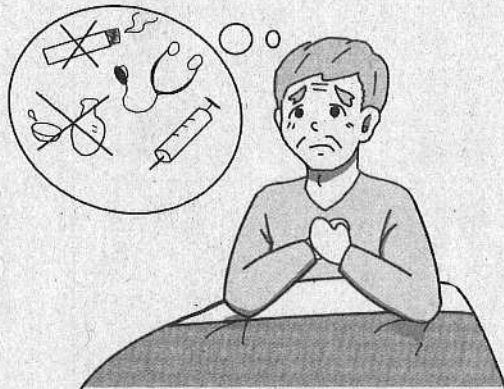


イラスト 東北芸術工科大学 小出和

吸うヘビースモーカーだったのだが、その瞬間、首筋から背中や腰の辺りまで重苦しさが広がり、さらにそれが強くなった。

待合用のソファに座っているのも苦しくなり、カーペットの床に横になると、枕を持つてきてくれた店の旦那さんが「多田さん、これって心筋梗塞でないのかな? 救急車を呼ぼうか」と、すぐに119番してくれた。

到着まで15分ほどかかるらしく、この間、染髪料を洗い流し、髪を乾かしてもらった。その後、担架で救急車に乗せられ大学病院へ。救急救命室の処置台に乗せられた。

服を脱がされ、超音波エコーとX線検査後、担当の医師からは「多田さんは急性心筋梗塞です。血管が1本、完全に詰まり血液が流れない状態なので、カテーテル(管)を入れてステント処置をしま

す」と告げられた。

そして、全ての処置が無事に終わり、高度治療室(HCU)に5日間、一般病棟に12日間入院した。

処置の翌朝、担当の医師からは、かなり重度の心筋梗塞だったと聞かされ、「救急処置があと1時間遅ければ、命が危なかったかもしれない。今回は運が良かったのか言えませんが」と諭された。退院後は、禁煙はもちろん、お酒も控えている。おかげさまで体調は良い。

生涯で初めてといえる今回の入院は、最初に触れたように、多くの方にお世話になってきたことを病床で振り返りつつ、自分や農園のこれからを考える一つの「転換点」になった。

今回、当欄の筆者の一人に加わることになったのも健康が故の縁。改めて、一日一日を大切にしながら生きていくことを考えている。